商売繁盛の願いを富士山に託す　ー引札にみる富士山の姿ー

<静岡県富士山世界遺産センター　学芸課　准教授　井上　卓哉>

テレビのコマーシャル、ウェブサイトのバナー、新聞の折り込みチラシ、人が集まる場所や目に付きやすい場所に貼られたポスターなど、私たちの身の回りには視覚に訴えかける広告が溢れています。こうした広告は様々な目的のもとで作られていますが、主要な目的の一つに、「モノをいかに宣伝し、売るか」ということが挙げられます。

日本においては、モノの宣伝や販売を意図して、店先の暖簾や看板などに商店の屋号や商品を掲げるという行為が中世末期から近世初期にかけておこなわれていたことが、洛中洛外図などの風俗画から確認されています。その後、江戸時代の中期には、暖簾や看板よりも積極的な宣伝の方法として、商店や商品の名前を記した木版刷の広告が登場し、人々の生活の中に定着していくこととなります。これらの広告の一つに、江戸時代から明治・大正時代にかけて盛んに発行され、年賀（歳暮）や中元のしるしとして、日頃付き合いのある顧客に配られたものに、「引札（ひきふだ）」があります。

写真1

引札には、写真１のように、絵のみが描かれている状態のもの、いわゆるテンプレートを作り、それに店名や商品名を入れるという方法で作成されたものもみられます。また、江戸時代には木版刷であったものが、明治時代に入ると、印刷技術の進展により、石版刷や銅版刷の引札が登場し、木版刷と比してより鮮明さや華やかさをもつものがみられるようになります。こうした引札の作成には、江戸時代から明治時代初期にかけて流行した錦絵の職人や、その技術を受け継ぐ人々が大きな役割を果たしました。

また、引札は、「客を引く」ことを願ったことが語源の一つであるとの説もあり、その願いが叶うように、福の神とされる恵比寿・大黒・布袋、鶴、鯛、松竹梅といった縁起が良いとされる図柄が選択されています。その中には、以下にご紹介するような富士山を図柄として選択した引札も含まれており、当時の引札において富士山は主要なテーマの一つであったことが窺えます。

まず、写真2は、津市岩田町（現在の三重県津市）において紙や砂糖、荒物（雑貨類）を扱っていた桔梗屋の引札です。図柄のテーマは鏡餅と、初夢の際に縁起が良いとされる一富士二鷹三茄子。写実的な富士山を描くのではなく、鏡餅に添えられる昆布で富士山の形を表現しています。鏡餅の昆布が持つ、「慶びをひろめる」という意味と富士山が一つとなった興味深い例といえるでしょう。

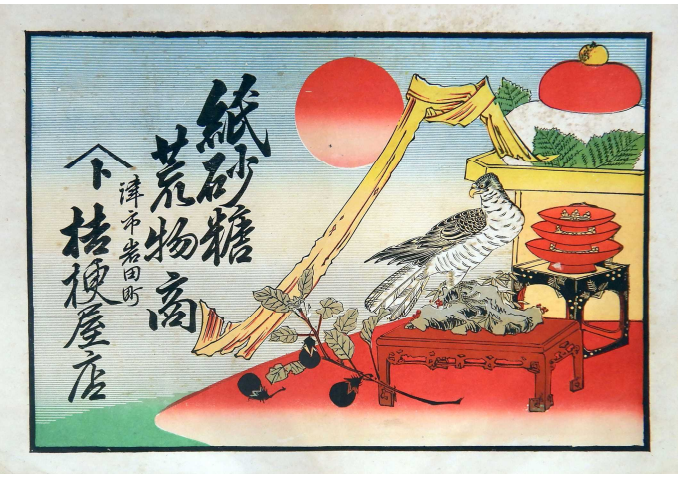

写真2

写真3

次に、写真3は淡路富嶋村（現在の兵庫県淡路市）の染物商、谷口由吉の引札です。小判が敷き詰められた床に座り、短冊に何かを記す恵比寿・大黒の背後では、作物の豊作を願う繭玉飾りに縁起物を飾り付ける子供たちの姿が描かれます。さらにその背後には、子供たちに向かって進む宝船と羽ばたく鶴、そして遠くそびえる富士山。豊かな吉兆を感じさせる、まさに引札らしい引札です。

写真4

そして、写真4は、江州甲賀郡大原村（現在の滋賀県甲賀市）の薬屋、森口廣明堂の引札です。画面上部には松と梅、画面下部には米・麦・稗などの五穀が描かれるとともに、中央の扇面の中では、富士山をバックに船に乗る恵比寿と大黒が描かれます。恵比寿の持つ竹竿は、上部の松と梅とセットで松竹梅となり、大黒は鎌で藻を刈っています。藻を刈るという行為は、「儲かる」という言葉にかけられており、画面右上の「五穀は実る　松梅繁り　富士の山ほど　金が儲かる」という詞書と合わせると、当時の人々にとって、富士山は多産（ものを多く産すること）の象徴でもあったことが推測できます。

最後に、写真5は、鮑海郡南平田村大字砂越（現在の山形県酒田市）の白石商店の引札です。画面上部の絵は、梅の枝を折る女性が描かれ、下部の絵には田植の早乙女が描かれます。上部の絵は、梅は枝を折っても皮から水分を吸収し花を咲かせるという豊かな生命力を暗示したもの、下部の絵は、かつて田植には田の神を迎えるという予祝の祭りがセットになっていたこと（現在でも各地の芸能として受け継がれています）から、田植の主役である早乙女の姿を通して豊作を願うものといえます。こうした願いの背景に富士山が描かれおり、前述の多産の象徴性を裏付けるものといえるではないでしょうか。さらに、この引札には明治32年（1899）の暦が掲載されていることから、前年に作成され、歳暮や年賀の挨拶にあわせて顧客に配られ、富士山が各家庭の新年を彩る一品となったのかもしれません。

写真5

さて、ここで紹介した4点の引札はいずれも、富士山の周辺の商店のものではなく、遠く離れた地域で用いられたものです。現在のように気軽に長距離の移動ができるとともに、様々な媒体を通して富士山の姿を見ることができるのとは違い、当時のそれらの地域では、実際の富士山を見たことがある人は限られていたはずです。にもかかわらず、引札の図柄として富士山が盛んに用いられた背景には、富士山が持っていた多産という象徴性を通して、商売繁盛の願いを受け止めるものとして重視されていたと考えられます。

ご存知の通り、富士山は火山によって生まれた山であり、自然物です。しかし富士山は自然物であるとともに、ここでご紹介した多産をはじめとする様々な象徴性を付与され、様々な意味を持つアイコンとして利用されてきた歴史を持っています。その歴史を紐解いていくことも、世界文化遺産である富士山の普遍的な価値を継承するための一つの方法といえるのではないでしょうか。

※いずれの引札も筆者蔵